

[第24回教育研究推進室ワークショップ]

大阪大学文学部・文学研究科における 留学生向けの「日本語科目」の現状と課題

鄭 聖 汝

大阪大学文学研究科専任講師

2010年1月8日(金) 14:30～16:30

文学研究科130会議室

教育研究推進室では、平成21年度総長裁量経費によるプロジェクト「人文系大学院における留学生向け日英語カリキュラムの開発」(代表：羽賀祥二)の一環として、平成21年10月29日に大阪大学文学研究科を訪問し、国際連携室専任講師の鄭聖汝先生に、大阪大学文学部・文学研究科における留学生向け日本語教育の現状と課題についてお話を伺った。その際、留学生に対する日本語教育をテーマとした教育研究推進室のワークショップでお話いただくことをお願いしたところ、快諾を得ることができた。以下、2010年1月8日(金)の14時30分から約2時間にわたって開催したワークショップの概要を記す。当日は、教員だけでなく、留学生にも参加を呼びかけた。参加者は教員8名、留学生を含む学生12名の計20名であった。

なお、鄭先生は韓国出身で、1994年に渡日、1995年に神戸大学人文学研究科博士課程(言語学専門)に入学、博士課程修了後、2000年度から学術振興会の特別研究員、2003年度から大阪大学文学研究科に勤務されている。

司会：お忙しいところお集まりいただき、どうもありがとうございました。今日は教育研究推進室のワークショップということですが、今年度、教育研究推進室では総長裁量経費をいただきまして、人文系留学生のための日英語プログラムというものに取り組んでいます。留学生に対する日本語教育、それから英語で授業をやるという話も最近では出ていますが、それに対してどう取り組んでいけばいいかということで、いろいろなところへ行って調査をしてみました。その中で大阪大学を訪問したときに、今日の講師でいらっしゃる鄭先生のお話を伺ったところ、大阪大学では、もう実際に留学生向けに日本語授業をやっている

やると伺いました。名古屋大学ではまだ具体的な取り組みをしていますが、留学生も増えてきましたので、何か取り組みをしなければいけません。その場合、やはり既に授業をやっている大阪大学の事例が参考になるのではないかとということで、鄭先生には遠いところをおいでいただきました。今日は留学生の方にも参加してもらっていますので、まず鄭先生からお話を伺った上で、どうしていったらいいのかということを話し合う機会にしたいと思います。それでは、最初に鄭先生からお話しいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

鄭：よろしくお願いいたします。大阪大学の文学研究科の鄭聖汝と申します。はじめに、私のプロフィール、履歴をお話ししたいと思います。私も留学生で、日本に来たのは1994年です。そして6カ月間ぐらいの研究生を経て、1995年に神戸大学の言語学科の博士課程に入学いたしました。それから4年かけて

1999年度に博士論文を書きまして、2000年度から学術振興会のポスドクをやり、2003年度から大阪大学に勤務することになりました。

名古屋大学は、今日が初めてではなくて、実は2回目なんです。最初に来たのは恐らく20年ぐらい前だと思いますが、水谷先生の音声学の授業があって、日

本語の正しい発音を教えてくれるということだったので、私も発音を直してもらえないんじゃないかと期待して、その授業を聴講させていただいた記憶があります。そのとき非常にキャンパスがきれいで紅葉がきれいだったという印象があります。

今日は、大阪大学の文学部・文学研究科における留学生向けの日本語科目の現状と課題についてお話ししたいと思います。

まず、大阪大学の文学部・文学研究科の現状ですが、2009年12月現在、留学生の数は107名です。全体は1,400名ぐらいいますので、10%に満たないという状況です。割合から見ると、半分くらいが博士課程の学生です。一番少ないのは学部生。なぜか学部生の留学生が少ないんです。入学しても1人か2人という状況です。

それから分野別に見ますと、14分野のうち一番多いのが日本文学、そして日本語、日本学、こういう順番です。これを見るとお分かりになると思うんですが、95%くらいが日本関係じゃないかなと思います。名古屋大学にはない日本学というのが大阪大学にはあります。比較文学といっても日本と中国の文学とか韓国の文学とかの比較ですし、演劇学といっても能を研究したりするので、ほとんどが日本関係の研究をやるという状況です。

出身地別で見ると、ほかの大学は中国人留学生が多いというふうに聞いていますが、大阪大学は韓国人留学生が多くいます。私が来たから多いというわけではないんです。理由は分かりません。それから、漢字圏と非漢字圏で見ますと、70%くらいが漢字圏、30%くらいが非漢字圏になります。30%の学生は、漢字を初め、かなり苦労しているということが予想できます。

それで、本学部で開講している日本語科目には、この2つがあります。大きなタイトルは日本語となっているんですが、その下に「実践日本語」と「論文作成法」という2つの科目があります。この2つの科目とも私が担当しています。「実践日本語」というのは、日本語運用能力の向上と位置付けています。これは、普通の商用の日本語ではなくて、専門の講義・演習や研究会に参加するために必要な日本語能力という位置付けになります。この授業は学部生と修士課程が対象なので、留学生が107名いても、対象になる学生は半分、50名くらいになります。「論文作成法」も同じなんですが、論文を執筆するにあたって日本語力に不安のある留学生を対象とするという位置付けになっています。両方とも、日本語力とか日本語の運用能力とい

うような、日本語に関して不安を持っている留学生を対象にするという位置付けになっていることがお分かりになると思います。この科目は、日本人学生は取ることができません。

「実践日本語」は前任者のときからずっとやってきた授業で、「論文作成法」という授業は私が始めました。2003年度に私が着任したときスタートした授業です。

一般的な理解として、論文作成法とか論文の書き方といっても、そもそも教えて分かるものなのか、教えられるものなのか、という疑問があると思います。というのも、教える側の我々には、論文はこういうふうを書くものだよ、と教えてもらった記憶がないんですね。私もそうです。でもなぜか論文を書けている。それを学生に教えられるのか、そもそも教える必要があるのか、という問題があると思います。

そもそも、論文は人に教わって書けるようになるものではない。だから、それはもう勘の問題だと言うこともできるかと思います。モデルになる論文があって、その人の論文をまねして書いているうちに、自分なりの形が何となく整ってくるというのが、今までの論文の書き方というか、論文を書いているわれわれの現状だと思います。だから、留学生に教えることに対しては疑問があると思うんです。けれども、大阪大学がこういう授業をやりようとしたのは、こういう経緯があったからだと思います。つまり、理系の留学生と違って、文学部・文学研究科の留学生はちょっと違った環境に置かれているということです。

第一に、出身の国によっては今まで論文を書いた経験のない留学生がいるということが、多分一番の理由になったと思います。当時この授業を始めようとしたときの研究科長は河上誓作先生で、こういう授業の位置付けなどを、多分河上先生が考えられたと思うんですが、留学生は、基礎知識が十分でない中で取りあえず研究をスタートせざるを得ない状況に置かれています。文学研究科、特に文学部の学生はそうなんです。一方、留学という限られた時間の中で、何とか論文を書き上げなければならないという切羽詰まった状況もあります。そして、文学部・文学研究科の特性として、一般に日本語で論文を書くことが要請されています。でも、日本語の基礎知識が足りない。時間の制約はあるし、論文を書いた経験もない。こうしたいろんな条件・要素があって、こういう環境にある学生を何とかサポートできないかということで、論文作成法の授業が開講されるようになりました。

先ほど基礎知識の不足ということを申し上げました。基礎知識の不足というと、能力が足りないんじゃないかというふうに理解される恐れがありますが、実はそうではないということを、ご理解いただきたいと思います。基礎知識が足りないという場合、幾つかの要因があるんですね。

一つは国によって学習歴が異なるということがあります。つまり、そういうことを教わっていないから、人文学で必要とされる基本的な知識が必ずしも十分じゃないという場合があります。これは多分理系の留学生とは全然違うと思います。理系は、大体土台が同じなので共有知識があると思うんですが、文系の学生の場合、母国では主として日本語のトレーニングを中心に勉強してきます。それで、人文学の基礎となる概念や用語に関してはあまり勉強したことがないのが実情なんです。

ところが、日本に来るといきなり研究者扱いされて、「あなたは何を研究したいんですか」とか「研究のタイトルは何なんですか」と言われて、戸惑う留学生が少なくありません。研究者扱いされると、かえって分からないと言いくくなくなってしまって、基礎知識が足りないところを埋めることも難しくなってしまうと思います。

論文の書き方に関しても同様で、どういうものが良い論文なのかというモデルが頭の中に形成されていないんです。修士課程の留学生に聞くと、印刷物はすべて立派なものだという印象を持っています。印刷してあるものは受け入れるべきもので、批判するべきものでないという印象を持っている。そういう学生がかなりいます。

結局、良い論文はどういうものかというモデルが形成されていない。研究をスタートする時点では、それでいいのかもしれません。そうすると、身の回りにいる同級生や先輩を見本にすることになります。そのとき、悪いサンプルを見本にしてしまうと、それが固定してしまって、なかなかいい論文が書けなくなってしまう。そして、それがずっと続いてしまい、そういうことについて、反省したり、修正したりする機会はあまりないんじゃないかと思います。

大体、発表しろと言われると、その日から図書館に走り回らるんですね。そうすると、それに忙しくなって、どうすれば人に伝わる発表になるか、いい発表とはどういうものか、どう書けばうまく伝わるか、といったことに全然頭が回らなくなってしまうんですね。それが、今の大阪大学の学生を見たときの現状だと思います。

います。こういう状況なので、何かサポートしないといけない。こういうことが、論文作成の授業につながっているのではないかと思います。

もう一つは、これはご存じだと思いますが、留学生にはかなり厳しい時間的な制約があります。一つは経済的な理由で、早く書き上げないと永遠に授業料を払わなければならない。もう一つビザの問題もあって、日本人の学生よりも短期間で論文を仕上げなければならないという状況があります。こういうことを理解した上で、どのようにサポートすれば、論文を書いてちゃんと卒業できるのかということが課題になるかと思っています。

留学生からも、生の声として、こういうことをやってほしいとかいろんな要求がありました。大阪大学には『研究科長と留学生の懇談会』というものがあります。2002年度から今までに4回やっていますが、これも河上研究科長のときにスタートしました。研究科長が出席なさって、留学生が20人から30人ぐらい集まるんですね。いろんな要求がありますが、その中で、論文と勉強に関するものだけを集めるとこういうものがありました。これは大事な留学生の生の声です。名古屋大学も大体同じだと思うので、ちょっと読み上げてみたいと思います。

日本文学のような文学関係の科目は、日本人学生のレベルで授業が進行しているので、付いていくのが難しい。基礎的な概論クラスなどを設けることはできないか。2004年度に出た意見ですが、これは、まだ解決していない問題です。そのときの研究科長はフランス文学の先生で、最初は、院生をちょっと雇って授業をやればいいという話が出たんですが、研究科長は「いや、概論の授業こそ、大家がやらないとできない」とおっしゃって、それきりになってしまっています。

次は、論文作成法の授業が専門の授業と重なって受講できないという苦情。これは私の悩みでもあります。論文作成法の授業を増やしてほしいという要請もありましたが、これは事実上無理です。授業をちょっと動かそうとしたら、別の学生から「それは駄目です」と言われて、別のところに動かそうとすると、また別の学生が駄目と言うので、結局はそのまままになってしまいました。だから、所属している研究室によっては、永遠に受講できないこともあるかもしれません。実際あると思います。これを改善するいい方法は今のところありません。

日本の教育システムは母国と異なる点が多いという意見もあります。例えば日本では研究中心の専門科目

が多い。一方、解説や概論のような授業科目は少ない。それで、基礎知識を勉強できる機会が少なく、勉学に困難が生じているというのです。文学、歴史など、基礎知識の勉強ができるような授業科目を開講してほしいという意見です。これは2004年で、こちらは2006年度に出た意見。学生も違いますし年度も違いますが、毎回取り上げられる問題で、一向に改善できていません。

方法論についての指導が欲しいという要望も結構あります。母国では先生がテーマを決めてくれる。日本ではいきなり「あなたは何をしたいの」と言われて、戸惑う学生もかなりいます。ちなみに、これは中国の学生でした。中国では、あなたはこのテーマをこうやって研究せよと言われて、その通りにやっていけば何も悩むことなくやれた、というんです。こういうことは、指導教員の耳にはなかなか入らないと思います。でも我々のような相談を受ける側には気楽に話せるので、こういう話が届くんです。こういう悩みを持っている学生も結構います。

それから、これは2008年度、2009年度、つい最近、私が実際に受け付けた相談事例です。年度が違って学生が違って、同じことが繰り返されているということが分かります。専門の勉強に移行するための基本的な知識が足りない。基本的な知識を勉強できる機会が少ない。概念や用語などが分からず戸惑っている。日本語は理解できるが、具体的にどういうことなのか分からない。母国で習ったことがない用語が出てくる。習っていても、母国と日本で意味が違う。そういうことに戸惑っている学生がかなりいます。

一方、分析の道具もないのにどうしたら分析できるのか、と不安を抱いている留学生には、ヨーロッパ系の学生が多いです。道具を与えないで、いきなり研究をやれと言われても、一体どうやって研究するのか、というわけです。博士課程ぐらいになると、大体こんなものかなと思って、なじんでしまうのかもしれない、あまり言わなくなるんですが、修士課程1年くらいまでは、だいたいこういう問題をぶつけてきます。

また、こういうことを要求する学生もいます。入門書など、それぞれの領域における最小限度の必読書ですね、それをリーディング・パッケージとして示してほしいという要求です。それをホームページにアップロードして、留学に来る段階で分かるようにしてほしい。こっちに来ていきなり言われても困る。要求されるものを日本に来る前に勉強してきたい、こっちに来て馬鹿にされたくないというわけです。

これは、哲学の研究というか勉強をしに来た学部学生の悩みです。彼は学部生なので、哲学の流れとか、現象学とその前の合理性の関係といったことを全部それなりに把握してから理解したいのに、いきなり各論に入ってしまうので、前後のつながりとか全体の把握が全然できないというんです。この学生は、頭の中が大忙しになって、自分だけ付いていけないのではということで情緒不安定になって、閉じこもりぎみになってしまいました。本も何を読んだらいいの分からない。この学生は韓国の学生でしたが、結局どういう選択をしたかという、夏休みに韓国に帰って、自分の母校で哲学の概論を聴いてきたそうです。彼は、それで少しは掴めるようになったという話をしていました。大阪大学では、いきなり各論に入ってしまう。各論は、全体が分からないと結局分からないんです。そういう悩みをぶつける学生もいました。

これも結構言われていることです。この相談を最初にしてくれた学生は、文学部の学生じゃなくて理学部の学生です。その学生はたまたま私と親しくて、自分は議論するのが好きなのに、相手をしてくれる人がいないと言います。自分の理解が正しいかどうか確かめたいから、自分の先輩や同級生をつかまえて議論したいのに、何回かトライしてもなかなか応じてくなくて、結局駄目だったと。それで、大阪大学にはがっかりだということで、結局本当にほかの大学に行ってしまいました。

私たちは大阪大学の文学部で留学生に2つの授業を提供しています。先ほどの「実践日本語教育」と「論文作成法」ですが、2つとも、日本語の運用能力を向上させるための授業という位置付けです。でも、こうした生の声を聞くと、それでは足りないということを痛感しました。留学生が直面している問題は、日本語だけじゃないんです。ですから、留学生向けの授業を、言葉の運用能力より、人文学の基礎知識を重視する方向へシフトできないかと考えています。

人文学全分野に通用するような概論的な授業は本当に必要だと思います。それで、私が相談を受けた事例を今の研究科長に報告してみました。すると、私が所属している国際連携室で検討してくれ、と言われました。私が提案したのに結局私に戻って来てしまったわけですが、ほかの先生に相談したら、大阪大学では、大学院レベルの教養科目の必要性は認識していて、検討しているということでした。いつ実現するかは分かりませんが、全学レベルで検討の対象にはなっているそうです。

論文に関しては、単に論文を書けるというだけではなく、良い論文を書くためにはどうしたらよいかという方向ヘシフトすべだと考えています。つまり、論文作成法の授業では、単にこういうふうになれば取りあえず論文を書けるということを教えるだけではなくて、良い論文を書くためにはどういうことをすべきか、ということを教えなければいけないと感じています。

留学生に話を聞くと、留学した当初は、研究がどういふものなのか全然わかっていないので、とにかく授業についていって、何とか論文を書き上げたいというのが目標になっているんですが、論文を書き上げる頃になると、就職の問題が出てきたり、果たして自分一人で研究できるかという疑問がわいてきたりして、一人で研究できるちゃんとした研究者になるということが目標になってきます。ですから、研究者として一人立ちできるように、名古屋大学がトレーニングしてくれたかどうかということが、最終的な留学生の満足度につながるといいます。私自身もそうだったし、私の周りの人、同級生の話を聞いても、論文を書き上げて就職しようとする人たちの一番の悩みはこの問題です。私自身、ちゃんとトレーニングしてもらったかどうかと、考えてみたりするのですが、いい研究者、いい人材を育成するために何をしなければいけないか、ということを考える必要があるのではないかと思います。

ただ、大学院レベルで概論的な授業が必要だと言っても、専門領域を超える部分はどうしてもありません。それでも、私が担当している2つの授業を自分なりに工夫して、何とかそういう留学生のニーズに応えられるような授業にできないかと考えまして、私なりの取り組みをしています。

「実践日本語」の授業は90分なんですが、授業は2本立てでやっています。一つは新聞記事を読む練習です。新聞には、文化的なこと、婚活の話、宙に浮いた年金の問題など、日本の社会経済文化の状況が分かる記事がたくさんあります。まず、それを声に出して読む練習をして、記事の内容をインプットします。記事は前の週に渡してあって、授業では、記事の内容をまとめて自分の言葉で言えるようにする訓練をするんです。学生に要約させると、全体を見ずに、自分が面白いと思ったところを言ったりするんですが、文章全体として何を言いたいのか、要約した内容とタイトルやサブタイトルはどういう関係なのかといったことを常に意識させることによって、まとめる能力を養うこと

にしています。

もう一つは、こういう教材を取り上げています。この授業は通年なんですが、来年度はエドワード・ホールの『文化を超えて』という本を読むことになっています。こちらの方は内容の理解が中心です。この本には非常に抽象的な語彙や用語がたくさん出てくるので、まず、そういう用語を解説します。例えば「外延」とは何か、「アイコニック」という言葉が出てきたらそれはどういうものなのか、それが日本語ではどう翻訳されているのかといった基本的なことを解説します。「モダニズム」とか「ポストモダニズム」とか「構造主義」とか、そういう人文学の基礎的な知識になりそうなものを、内容と関係があるところで説明しながら、自分なりに学生のニーズに応えられるような工夫をしています。

一方、「論文作成法」の授業ですが、「論文作成法」には1と2があって、1では論文の構成とか引用の仕方ということをやっています。教材は『大学生と留学生のための論文ワークブック』（くろしお出版）を使っています。この教科書は、日本語の表現がざっと見て分かるようになっているので、非常にいい教科書だと思います。京都大学学術出版会でもこれと似たような本を出版すると聞いているので、それも後で比較してみたいと思っています。

論文作成法の2では、論理的な文のつながりということで、こちらも2本立ての授業をやっています。一つは接続詞の使い方です。『論理トレーニング』（産業図書）という本を使っているんですが、練習問題もあって、これもかなりいい本です。この訓練を受けた学生は、接続詞の使い方がちゃんと分かって、長い文章でも要約ができるようになるんです。

もう一つは私のお気に入りの教材なんですが、『論理学がわかる事典』というのを使っています。この本は、論理学だけでなく、研究するとはどういうことかということを理解するのに非常にいいんです。どのように疑問を立てればよいか、どうすればセンスのいい説明ができるかといったことが、この本を読むと、結構できるようになるんですね。

こういう授業を通して私が学生に強調しているのは、結局、研究するとは何をどのようにすることなのかということです。研究テーマにはいい問いと悪い問いがあるといったことも言っていますし、研究は、確実な方法論を駆使して未知の新しい世界を発見し説明することだ、といったこともすごく強調して言っています。循環論に陥らないようにするためにはどうすれ

ばよいのか、読者を納得させるためにはどうしたらよいのか、こうしたことについて、なるべく具体的な例を挙げて話すようにしています。抽象的な言い方だと、学生は何を言っているのかさっぱり分からないんですね。できるだけ具体的な事例で説明をすることになっています。

実はシラバスに載っていない授業も一つやっています。これは、自分ではサービス授業と名付けていて、大阪大学の文学部でも誰も知らないんです。文学を研究する人には思想的な背景も必要になります。ところが、何かを分析しようとする、という思想的なことが何も分からない、ということで悩んでいる学生が多いんですね。この授業は4年前に始めたんですが、そのとき、大江健三郎の三部作の研究をやっている学生が、実存主義についてちょっと知りたいんですけど、先生、本と一緒に読んでくれませんかと言ってきたんです。最初は、私も哲学研究者じゃないから分からないよと言ったんですが、でも、その学生よりは分かっているかもしれないと思って、じゃあ何か概論っぽいものを選んでやりましょうということになったんです。あまり専門的なものを読むと分からないので、『図解雑学』というシリーズにたどり着きました。

まず学生には、私は哲学の専門家ではないから、これから言うのは私の理解であって、哲学の一般的な考え方ではないかもしれない、私はあなたたちを入口まで案内するが、間違いがもしあったら、自分で発見してくださいと言います。主に哲学書を読むということになっていて、私にとってはとてもつらい作業なんですけど、それでも楽しくやっています。今は現代思想について読んでいます。

最後に、これは私の授業に対する学生の評価です。学生には、定期的に聞く以外に、授業の後などにも聞いているんですが、ここにあるのは、論文作成法に対する評価になると思います。接続詞の使い方が分かって、文のつながりが明瞭に理解できるようになった、

内容が把握できるようになった、文章の全体的な構造が分かって、まとめやすくなった、長い文章を読むスピードが上がった、こういう意見がありました。また、用語の説明や練習問題があつて、授業が一方的じゃないのがよかった、分かりやすくてよかったという意見もありました。自分の考え方が変わっていくことを実感したという学生もいます。これは、自分の考え方がだんだん論理的になっていったということで、非常にうれしいことを言ってくれたと思います。そして、コミックを資本主義に関係付けて研究しているアメリカ人学生は、授業のおかげで、日本語で修論を書ける自信ができたと言ってくれました。こういう声を聞くと、私の授業にも効果があったのかなと思います。

そして、これは意外な効果だったんですが、就職の面接を受けにいった学生が、「先生、鳥肌が立ちました」と興奮して帰ってきたこともありました。これは、博士に進学せずに就職する学生だったんですが、授業で私が言ったことと全く同じことを面接で聞かれたらしくて、それで、こういうことを言ってくれました。

論理的な思考をする、自分の言葉で言う、オリジナルな考え方を持つ、そして、人に説明するときはどうしたらよいのか、授業ではそういったことをずっと話していたんだろうと思います。それで、その学生は見事に面接に合格することができました。そういう学生もいたので、私は、この授業は論文だけでなく就職にも役に立つと言っています。

一方、改善してほしいという意見もあつて、それは、もう少し書く練習をしてチェックしてほしいという意見です。これは、私にはかなりつらい作業ですが、どうするか考えたいと思います。

私の話はこれで終わりです。ご静聴ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。非常に具体的なお話をどうもありがとうございます。今日は留学生の方にも来てもらっていますので、ぜひ正直なところを聞かせてもらいたいと思います。まず、先生の今のお話について質問などございませんか。

金山：私は哲学の教員で、これは留学生ばかりじゃなくて日本人の学生の授業にもいいなと思いながら聴いていました。ただ、実存主義とか、哲学のいろんな

用語が出てきたとき、私は、日本人の学生に日本語の本を読むことは勧めないんです。英語のほうがずっときちっと説明できているし、日本語の翻訳は悪いから信用しないようにと言っています。

鄭：でも、多分、留学生が言っていることと先生がおっしゃっていることは、だいぶレベル的な差があると思います。つまり、留学生はまず、例えば、数字の「1」が抽象的だと言うときに、なぜ抽象的なのかと

ということが分からないんですね。

金山：それを例えば、Why is it abstract? そういうふうにやっても分からないんですか？

鄭：うーん、だから「犬」と言っても、じゃあ犬がなぜ抽象的なのかということが分からないんです。犬と言っても、プードルだったりブルドックだったり、ブルドックでもいろんなブルドックがいたり、そういう具体的なものと抽象的なものとの違いが分からない。「抽象的」という概念そのものが分かっていないんです。言葉はすべて理解しているので、多分発表するときも、全部分かったようにプレゼンはすると思います。でも、実際に聞いてみたらよく分かっていないんです。

金山：それは、私が哲学の概念を日本人の学生に聞くときにも感じることです。実は私の概論の授業にも留学生がきていまして、日本人と同じような質問をしています。

鄭：私のほうから一つ質問したいんですが、私は言語学者なのに、哲学の授業をやっています。それで、かなり私の言語観に基づいた解釈ということになってしまっていて、哲学者が言っていることとずれがある可能性もあるんですね。そんなふうで教えてもよろしいのでしょうか（笑）。

金山：もちろん。私自身も結構ずれがあると思いますし、そもそも自分の思っていることがそのまま学生に伝わっているかどうか分からないところがありますから。最終的には、やはり学生が自分でそういうことを取り入れながら、人間観の理解や文化理解につなげていくということだと思います。

鄭：学生には、私が言っていることは間違いかもしれないので、あなたたちが後で勉強して修正しなさいと言っています。でもたとえ間違った偏見でも、それさえなければ、何をどう学んでいいか分からないわけですから、それよりはよっぽどましだと自分に言い聞かせながらやっています。

金山：学生たちもそれは自分でやりますよ。ありがとうございます。

司会：理解の問題は、多分日本人も同じような問題があると思います。さて、他にはいかがでしょうか。

町田：論文作成法というのはいいですね。大変立派な授業をなさっているようで、名古屋大学にもこういう授業があればいいなと思います。実践日本語のほうですが、私も、社説を要約させるというのを日本人の1年生を対象に授業でやったことがあります。同じようなことをやっていらっしゃるので安心したんです

が、ディスカッションはやはり難しいですね。ここにも私の学生がいっぱい、韓国人もいっぱいきていますが、アジア人が特にそうなのかどうか分かりませんが、やはりあまり議論はしないんです。ディスカッションをする習慣が、アジアには特にないようですし、ヨーロッパもそんなにあるような気がしないんですね。ですからどうやって議論させればいいのかよく分からないんです。しろしろと言うんですけど結局しないので、全部私がしゃべっておしまいという授業に大体なってしまう（笑）。どういうふうに工夫されているのか、ちょっとお聞きしたいと思います。

鄭：そうですね。例えば、鈴木孝夫さんの『言葉と文化』のような内容であれば、ディスカッションになるんですね。自称詞と対称詞の話が出てきますよね。私の授業にはそのとき9カ国の学生がいたので、いいチャンスだと思っていろいろ調べました。日本語では、公園に行って「ぼっちゃん、今何してるの?」、「ばく、何してるの?」と言いますが、ほかの言語だったらどう言うか調べるんです。するとお互いに、いや、うちの言語ではこうだ、こっちはこうだとか、そういう話がどんどん盛り上がって、そうすると自分で調べたいという気持ちになるんです。学生同士でも調べ合ったりして、私がレポートを書けといたら、ある学生は自分の国に行って、自分のお父さんを実際にビデオで撮って、そういうことをした学生もいました。

でも、具体的な状況から離れたものを持ってきて議論しようと言っても、なかなか議論はできないんですね。ですから、授業の中で、自分でも調べられるような状況で、研究というのは身近にあるということも感じさせつつ、自分でも調べてみようという段階になるまでが、多分一番重要じゃないかなと思っています。そして、自分の考えを言うというより、あなたの国ではどうですかといった感じで発言させる。立派なことを言うのが意見だということになるとみんな引いてしまいます。でも、身近なこと、自分にも分かることを言わせると、どんどん話が盛り上がって、こういうことをやるのが研究かなという印象を持つんじゃないかなと思っています。

町田：分かりました。ありがとうございます。

司会：留学生の方からはどうでしょうか。これまでの経験から、何か質問や感想などはありませんか。

Q：鄭先生のお話はとても身近に感じました。さきほどの議論をするということについて言うと、私たちは日本語を研究しているので、いろんな日本人と盛ん

に議論をしたいんですが、日本人が来ないとか、その時間を作るのがとても難しいんです。実際、授業中にはあまり議論ができませんでした。議論をするにはどうしたらいいんでしょう。

鄭：「議論しようぜ」っていうことになるってできないんです。「こういうことについて今度議論しましょう」と言ったらだめで、だから大阪大学でも学生が議論しない。自分の経験からすると、議論というものは自然に議論になるんですね。友達同士で、自分はこういう研究をやっているんだけど、あまりうまくいっていないということから話してみる。「私は最近こういうことを考えているんだけど、あなたは思う？」でもいいし、とにかく自分の研究をしゃべりなさいと私は学生に言っています。

しゃべるとどういう効果があるかという、一つは自分の頭の中の整理ができるということです。それに、相手の意見も聞くことができる。そのとき、相手がばかなことを言ってもばかだと思ってはだめです。全然理解できないから関係のないことを言っているという場合もあるからです。私は、どういうふうになれば、理解してくれない人にも理解してもらえるか、自分なりに工夫しなさいと言っています。そういうふうに、自分の研究をしゃべっているうちに、話が少しずつ盛り上がって、その人と会ったときは必ず研究の話ができるようになります。最初から議論をしようとしても多分できません。

私の場合は、夜2時3時まで研究室に残って議論した覚えがあります。それが非常に勉強になるんです。議論することで、相手はどう考えているのか、相手との距離が分かるんですね。距離が分かると、発表するときに、どのように話せば説得できるかということも分かってくるので、私は学生にどんどんしゃべってほしいと言っています。

Q：私も、名古屋大学に最初に来たときはそうだったな、と思いながら興味深くお聴きしました。日本語のほうは、向こうで学部生のときに集中して勉強したんですが、研究につながる勉強はしていなかったのですが、最初来たときにはそれが一番の悩みでした。ただ、それは、学部の概論の授業を聴いたりしてだいぶ解消されました。むしろ、これから研究していく素材を探すのが一番大変だったなと思います。これで本当にいいのかどうかも分からないし、修士論文を書いて博士論文を書いて、その後どうなるんだろうと。とても長い道のりで不安ばかりだったので、先生や先輩から、この内容だともっと膨らむんじゃないかといった

コメントを最初に聞けたらよかったと思います。自分が考えていることへの反応を聞ける場があると、もっと留学生としてはいいのかなと思いました。

鄭：自分の環境は、自分で作っていくものだと思うんです。そういう仲間を自分でどんどん作っていくことが、留学生生活を成功に導くことにつながると思います。研究のことを話せる相手を、自分でどんどん作っていくというのが大事なことだと思います。

鎌田：私は留学生担当の鎌田と申します。今、文学研究科では、論文支援という形で、支援者を学位論文作成年度のM2、D3の人たちに配置していますが、今後はそれを強化していくという意味で、今日のお話はヒントになる点がたくさんありました。本当にありがとうございます。それで具体的に1点教えていただきたいのですが、先生のところでこうした授業をされると、いろんな専攻の人が集まるということですが、専門が違えば論文のスタイルも違うということがあると思います。一方で、いろいろな専門の人が集まることにポジティブな面もあると思うんですが、少しその辺を具体的に教えていただけないでしょうか。

鄭：そうですね、実際に私の授業には、文学部だけでなく、経済学部、法学部、理学部の学生が来ることもあるんですね。そういう学生に論文作成法の授業をする場合は一般化しないってできないんですね。特殊な語学の例を挙げることはできないので、かなり一般化しています。例えば引用の仕方とか参考文献の挙げ方とかは専修や講座によって全然違いますので、サンプルというか、言語学分野ではこうするというのをとりあえず教える。でも、専修によって全然異なるので、大阪大学だったら『待兼山論叢』を実際に見せながら、注の挙げ方とか参考文献の付け方とか、あなたの分野ではこうするんだと、具体的にはそのように指導しています。

内容的な面に関しては、実際に論文を書くときに、序論では何を書いて、方向付け、問題設定はどのようにして、論文の構成はどのようにするかといったことを、具体的な事例を挙げて説明しています。例えば文学だったら、夏目漱石の女性像について研究をするというような具体例を挙げて、その場合はどのようにするか、チャプターをこのようにまとめれば大体こういうふうな形になるとか、経済学だったら、例えば今のサブプライム問題を取り上げた場合、どのような問題が設定できて、それを研究するためにはチャプターをどうすればいいか、そういうことをできるだけ具体的に挙げるんですね。すると、こういうふうを書くのか

なという印象は持てるんじゃないかなと思います。学生の顔を見て、ちょっと分かりにくそうな顔をしている学生がいたら、その学生の分野の例を挙げて、あなただったらこういうことになるんじゃないですかというふうに言っています。

鎌田：分かりました。ありがとうございます。

司会：先ほど、自分で関係を作っていくという話がありましたが、留学生が多い研究室もあれば少ないところもありますよね。多いところは何となくそういう関係を作りやすいと思いますが、少ないところだと孤立してしまうこともあるかもしれません。そういう点では、留学生を集めて授業をやるというのは、まさにそういう関係を作るのによいのではないかと思います。ほか、いかがでしょうか。

金山：蛇足になるかもしれませんが、実は私、この間アメリカの Faculty Development に行ってきたんですが、そのときに『Publish & Flourish』というセミナーにも出ました。これは、論文をどういうふうを書くかというセミナーなんですが、書いたものは、専門家ではなく、まず自分と専門の違う人に読んでもらえと言うんですね。専門家に読んでもらうと、専門家は深読みしてしまうというんです。ところが非専門家は素直に読むから、分からないところは分からないと言ってくれる。だから、自分の専攻の中だけでなくて、もっと広く先生のような授業の中で自分のことを説明するのは、留学生の皆さんにとっても非常に役に立つんじゃないかなと思います。

鄭：そうですね。まず留学生に私が一番強調するのは、分かりやすく書くということ、それから、もう一つは、誰が読むかということを常に考えながら書くということを強調しています。つまり、レポートだったら読むのは教員一人ですが、論文なら、誰が読むかということを想定しながら、その背景知識も加減する必要がありますよね。誰が読むかによってこれを入れるべきか入れないべきかということが決まるので、何か文章を書くときは、これは誰に読んでもらいたいかということを常に考えなさいということを一番強調しています。

宮地：日本語学の宮地といいます。今日はありがとうございました。今お話があったように、教育研究推進室のほうから日本語の授業が留学生には必要じゃないかというご提案をいただいて、私は専門が日本語学というのと、名古屋工業大学で日本語教育に携わった経験もあるので「やれ」ということで、日本文化学の齋藤先生と言語学の佐久間先生とでそういう授業の中

身を考えているところですので、今日のお話は大変参考になりました。今のところ、週1コマ2時間、前期後期という形で、なるべく学生さんがほかの授業と重ならない時間、たとえば1限にやるといった工夫をして、今日もお話があったような問題はなるべく起こらないようにしようとは考えています。

それで、私が一番お伺いしたいことは、先ほども論文支援のお話があったんですが、大阪大学でチューターがどういう役割を果たしているかということなんです。名古屋大学では、論文支援やチューターの時間の配分をお願いして、マンツーマンで論文を見る、日本語のネイティブチェックだけでなく専門のことを知っている学生がアドバイスできる、という環境を用意しています。ただ、名古屋大学の場合には、先生のような授業がなく、教員もなかなか個別の指導が行き届かないので、チューターの日本人学生にも相当負担をお願いして見てもらっているというところがありますが、大阪大学ではいかがですか？

鄭：それは博士論文の場合ですか？

宮地：いえ、すべてです。学部生は大阪大学と同じように少ないのですが、研究生は大学院入試の勉強と一緒にやりますし、マスターコースの学生は普段の演習の発表から自分の研究発表もそうですし、修論まで面倒を見ます。博論もそうです。

鄭：でもチューターを採用できるのは1年間ですよ。

宮地：はい、本当はそうです。

鄭：大阪大学でも1年間はそういう面倒を見てもらえます。でも、チューターは、教員でもないし家庭教師でもありません。だから、何もかもチューターに聞いて、先生にやってもらえるようなことを要求してはいけないと言っています。勉強を助けてもらうのはいいことですが、何もかもチューターに頼ってはいけないと、留学生には言っています。1年経った後どうなるかという、それは2人の関係によって違いますよね。いい関係を作り上げたら友達になっているので、続けて見てもらえらと思います。そうじゃない場合は、誰に見てもらったらいいかということで悩んでいる留学生も多分いると思います。

修論や博士論文を書くときは論文チューター制度がありますので、そのときは、50時間つけています。時給は950円で、時間数も最初は30時間ぐらいだったんです。それで私が頑張って、時間数を増やしてもらいました。論文チューターは普通のチューターと違ってかなり専門知識を提供することになるので、時給を

1,400円ぐらいにしてくださいと言ったんですが、それはできないと言われたので、それならということで時間を増やしてもらいました。

論文を書くときも実は問題があって、留学生が書いた論文が非常に理解しにくい場合は、かなりチューターが書き変えるんですが、そうすると、この論文は誰の論文かという問題が出てきてしまいます。ですから、チューターの役目は、あくまで日本語のチェックだと言っています。論文のオリジナリティーがチューター側になっては困るんです。内容そのものにタッチしてもらっては困るので、あくまで日本語のチェックをやってくださいということを言っています。

宮地：私も、チューターからそういう悩みを相談されることがあります。留学生もべったりになるというよりは、むしろ負担を掛けてはいけないということで遠慮をする学生のほうが多いかなとも思いますし、その一方で、フォローする授業がないものですから、その時間を増やすことをお願いすると、今度はそういう指導のほうにどうしても入ってしまうということがあったりして、なかなか難しい問題だと思います。

さきほど金山先生からも、今日お話しいただいた授業が日本人学生にも必要で役に立つのではないかというお話がありましたが、日本語の文法的な特性や日本語の論文の型や論理の進め方というあたりも、やはり日本語ならではの問題や特徴があるので、日本語チェックと中身の指導というところの線引きについて、日本人学生であるチューター自身も知る機会があった方がいいのではないかと考えています。それで今ちょっと考えているのは、「日本語論文作成法」という授業をやるんですが、チューターの日本人学生にも参加してもらって、中心となる教員が論文の型を示したり語法や文法の説明をしたりするときに、その様子を日本人学生にも見てもらって、ディスカッションもしているかなと思っているんですが、いかがでしょうか？

鄭：それは日本人学生の負担が大きすぎるんじゃないでしょうか？ そこまで関与すると、日本人学生にとっては結構負担になると思いますが。

宮地：指導を積極的にしてもらおうというよりは、逆に日本語のチェックはここまででいいんだよということを知ってもらうためにということを考えています。

鄭：それはやっているうちにだんだん分かっていくと思います。考え方に関わる部分まで変えてしまうとオリジナリティーが全然変わってくるので、主張内容が自分のものでなくなってしまうですね。こういうふうに表現したほうがよく伝わるよとか、そういう提

案はしていいと思うんですが。

宮地：はい、ありがとうございました。

Q：遅れてきたのでちょっと分からないんですが、私は文学研究科に入る前に留学生センターというところで日本語教育、日本語科目という授業を受けました。大阪大学にも、留学生センターの授業があるんですね。

鄭：そうです。ただ、私の授業は留学生センターの授業とは全く質の違う授業です。留学生センターだとコミュニケーションのためのスキルを教えますが、私の授業は、研究会にいつて発表するための日本語を教えているので、その辺でかなり違ってくるんです。留学生センターではそういう授業はしません。だから私のような授業は留学生センターにはないんです。それに、文学部の留学生はかなり日本語のレベルが高いので、留学生センターの授業を受けている学生はほとんどいません。

Q：私も今、留学生センターで日本語を勉強しています。日本語の授業で作文の授業が2つありますが、研究につながる作文の授業はありません。作文の授業では、段落や接続詞などいろいろ勉強していますが、何か良い論文のモデルのような文章を読みたいと思います。

鄭：頑張ってください。ただ、何が良い論文か、というのは難しい問題ですね。

Q：留学に来る前にインターネットで必読書を探しましたが、見つかりませんでした。

鄭：必読書というのは、専門ごとの基本的な本のリストや論文のリストのことなんですね。だからそれは、その勉強をしたいと思う学生が基本的に読まなければいけない、その専修の基本的なものであったり今学期の基本的な必読書であったりするので、まずは指導教員に聞いてみてください。

司会：実際、そういう要望は結構ありますね。

鄭：ありますね。学生はみんな戸惑っているんですよ。ばかにされたくないから、それを教えてくれればちゃんと勉強するのに、何を勉強してよいか分からないと悩んでいる学生も結構いるんです。そんなに難しいことではないので、なぜやらないのか、私には不思議です。

Q：あと、チューターさんと勉強すると、ちょっと迷うことがあります。私の周りにはチューターさんと映画を一緒に見たという友達もいます。でも私はやはり、時間はもっと大事に利用したいと思います。だから、どうやったらチューターさんと一緒に論文などの

勉強ができるか考えています。

鄭：大阪大学では、自分からチューターに要求しなさいと言っています。チューターも何をしてあげればいいか分からないんですね。何とかしてあげたいんだけど、相手が何を望んでいるのか分からないから、映画を見にいったりすると思うんですよ（笑）。だからその前に、私はこういう本を読みたいとチューターに伝えてください。例えば寺村先生の『日本語のシンタクス』という本と一緒に読んでくれませんかと言えば、喜んで読んでくれると思います。

Q：ちょっと遠慮があります。

鄭：でもそれは遠慮じゃないんです。むしろ何も言わないのが悪いんです。だって向こうも心苦しいでしょう。お金をもらっているのに何もやってあげないのは、チューターにとっても心苦しいので、ちょっとこれをやってくれないかと要求したほうが、むしろいいと思います。

Q：ありがとうございます。

金山：先生がそういうことを、チューターと留学生を集めておっしゃる機会はあるんですか？

鄭：あります。チューター懇談会というのがあって、チューターのオリエンテーションですね。チューターだけ呼んで、今どういう指導をしているかということを知ったり、こういうことをやってください、時間をちゃんと決めてやってくださいとか、いろいろアドバイスをしています。最後までうまくいかなかったらチューターをいつでも交代できるので、ぜひいつでも言いに来てくださいということも言っています。

司会：それは名古屋大学にもあります。チューターガイダンスというんですが、個々のケースで違うので、チューターはこういうものだとい概には言いにくいですね。

鄭：言えないですね。一人ひとり能力も好みもやりたいことも違います。何をやってあげているかということは全然違ってきますね。

司会：予定の時間は回っていますが、ぜひこの機会にという方はいらっしゃいますか。

羽賀：一つだけお聞きしたいんですが、今先生がお話しになったのは、留学生に対してどういう授業をするかという留学生向けの授業ですね。

鄭：そうです。

羽賀：ただ、ドクタークラスになれば、一応論文の書き方、文献の探し方、それから論文批判という観点基本的には身に付けていると思うんです。そういうドクターに入った留学生に TA をやってもらって、論

文の作り方を計画的に学部2年生ぐらいのレベルの人たちに教えるような役割を与えてやることも大事だと私は思っています。私は日本史ですが、日本史の古典的な論文や名論文と呼ばれるようなもの、あるいは新しい研究成果ですね、それを学部の2年生に読ませる「日本史論文演習」という授業をカリキュラムとして設けているんです。そこにドクターの留学生を TA として張り付けて一緒に論文を読んでもらうという試みをやってきました。ただ、論文演習ですから、1人のチューターでは非常に負担なので、3、4人のチューター、日本人のチューターと留学生のチューターが一緒になって学部生に教え合うという授業をやっていたんです。最近では TA の数が非常に制約されてきて、一つの授業に1人の TA しか認められないという制度になってしまったので、その試みはもうできなくなってしまったんですが、それを経験した韓国からの留学生は、恐らく、学部の2年生に教えてあげるといった交流の中で、論文の作り方、文献検索の仕方や注の付け方というものを学んでいったのではないかと思います。そういう取組みも必要かなと感じているんですが、いかがでしょうか。

鄭：そうですね。ただ、大阪大学も専修の中での対応はばらばらで、文献の探し方をきちんと教えている専修もあればそれをやらない専修もあります。だから、どこの学生も結構不満があったりしますね。

羽賀：ですから、学部や研究科のカリキュラムの中で、留学生に対する授業をどう位置付けるか、それをきちんとしておかないとまずいと思うのですが、先生のやられている試みは、どのように他の先生方から理解されているのでしょうか。

鄭：どうでしょう。私が具体的にどういう授業をやっているか、内容的なことはご存じじゃないかもしれないですね。シラバスには、この講座を作った段階での位置付けが書いてあるだけなんです。だから、単に、日本語能力の向上ということをやっているんだろうと理解しているかもしれないですね。

羽賀：すみません、ありがとうございました。

司会：ほか、いかがでしょうか。

Q：私は韓国から来た留学生です。先生の講演はとても興味深く、私にもそういう時期があったので感心しました。名古屋大学にもランチミーティングや留学生パーティーがあって、研究科の中の留学生相談室にもサポートしてもらっていますが、先生のお話を聞いて、大阪大学の留学生は勇気があるなと思いました。悩みがあっても、なかなか……。

鄭：(笑) 言えないんですね。

Q：そうです。はい。

鄭：そうだと思います (笑)。

Q：一応研究者として扱われているので、研究の悩みがあってもなかなか言い出すことができません。飲み会に行くと、自然にそういう話が少しできたりするからいいのですが……。

(一同笑)

鄭：留学生はなかなか本音を言わないんですね。言わないというのは、プライドが高いからで、自分の弱点を見せたくないということが結構あります。韓国人同士だともっとそうなんですね。同じ韓国人同士だと、弱点を見せるということにかなり抵抗がある場合が多いんです。ですから、議論しましょうと言っても議論ができないのと同じように、相談しましょうと言っても相談に来る学生はいません。でも、雑談でもい

いから、何かしゃべるきっかけがあると、最近こうだとか悩みをぶつけてくることがあるんです。だから、まず仲良くなって、いつでも研究室に来て何かしゃべれるような状況があればいいと思います。ただ、留学生は非常に気を遣うので、行ったら先生の研究の時間を邪魔するんじゃないかと思って、あまり来てくれません。それで、学生が集まる時は、なるべくいろいろなことを話すようにしています。普通のことをしゃべっているうちに、そういう相談になったりすることもありますから。

司会：それでは、だいぶ時間も回っていますので、取りあえずここでいったん終わりにしたいと思います。今日は鄭先生、どうもありがとうございました。

鄭：どうもありがとうございました。

(一同拍手)